

下田座。手前の角店は三井横濱店。五雲亭貞秀画「横浜本町景港崎街新廓」(万延元年閏3月刊)の一部

# 開港のひろば

YOKOHAMA ARCHIVES OF HISTORY NEWS

編集・発行/横浜市総務局横浜開港資料館  
 横浜市中央区日本大通3番地 〒231 電話(045)201-2100  
 発行日/平成2年11月1日  
 印刷/南三信印刷所  
 横浜市広報印刷物登録第020055号 類別・分類C-BE160

来る11月「横浜の芝居」展によせて  
 1日より

## 横浜最初の芝居小屋

### 下田座の開場は安政六年十月中旬

『横浜沿革誌』の文久元年(一八六〇)九月の条下に、「下田屋文吉始メテ芝居小屋ヲ建築セン事ヲ請願スレトモ芝居興行ヲ許サス、因テ子供手踊ト換ヘ請願、許可ヲ得テ小屋ヲ建築ス、下田座ト云」という記述がある。これが『横浜市史稿・風俗編』以下の諸書に踏襲され、定説として通用している。しかし、万延元年(一八六〇)閏三月に出版された五雲亭貞秀の浮世絵には、すでに左上図版のような芝居小屋が描かれている。

「横浜商人録」(「神奈川県郷土資料集成・開港編」所収)をみると、文吉は開港時の安政六年(一八五九)六月に角力・手踊、文久元年八月に淨瑠璃・操人形・茶番狂言の営業を出願している。また、安政六年七月改の記載をもつ瓦版「御交易場所附並諸商人軒数明細書」に、「神奈川願人文吉、志丁目うら丁芝居地所、八月改の「御免貿易場明細書」には、芝居・曲馬・人形芝居地所とある。

開港直後の横浜の様子を知りうる資料に、三井横濱店の手代が本店に送った書簡類があり、

舞踊はつきものである。「手踊」の名目で芝居の興行が可能だったことについては、長谷川伸が「佐藤愛之助と芝居」の中で指摘している(「材料ぶくる」所収)。

これは、佐藤愛之助ことアーネスト・サトウの『一外交官の見た明治維新』にみえる、横浜在留中の観劇に関する記述に触れたものである。幕末か明治初年のことであり、長谷川伸が言っているように、サトウの通った劇場は下田座であろう。その後、明治三年(一八七〇)に佐野松と合併して下田座の松となり羽衣町に移転、十三年下田座平清、十五年羽衣座と改称する。

「当地志町目裏通り江先頃より芝居普請出来、先月中頃より相始メ候得共、何れも旅役者計、其上直段割合高直二付、一向不入之趣(西川武臣「開港直後の横浜と貿易」六頁、『横浜開港資料館紀要』七号所収)

これらの資料によって、興行開始は七月初旬、その間に普請を進めて十月中旬に完成、旅役者の一座で舞台開きを行なったが、不入りだったことなどが判明する。

芝居に対する制限の厳しかった江戸時代のことであるから、『横浜沿革誌』が記すとおり、正規の鑑札を得ることはできなかったろう。しかし、歌舞伎に

今回の展示には、下田座の松時代の芝居番付として、明治五年の市川團十郎(九世)横濱初舞台正月興行、羽衣座となつてからの番付として、三十三年の尾上菊五郎(五世)主演、三十七年の再建舞台開きを兼ねた市村羽左衛門(十五世)の襲名披露(尾上梅幸、六世尾上菊五郎共演)、新演劇では三十九年の山口定雄・定子父子、四十五年の松尾次郎一座等、大正三年の松井須磨子ら芸術座の公演を報ずる新聞記事などが出品される。翌四年に焼失、廃座となるまで、日本と横浜の演劇史とともに歩んだ劇場であった。

座談

『横浜の芝居』展によせて

横浜開港資料館では、十一月一日から企画展『横浜の芝居—明治・大正期の庶民文化』を開催いたします。そこで、今回の座談は芸能、とくに演劇について造詣の深い、倉田喜弘さんと古井戸秀夫さんのお二人を迎えてお話しをしていただきました。

——倉田さんは、明治期を中心とした芸能史の研究をされており、『近代劇のあけぼの—川上音二郎とその周辺—』(毎日新聞社)、『日本近代思想体系18芸能』(岩波書店)などの著書がございます。また今回の展示にもいろいろとアドバイスを頂いています。

倉田 私、幕末から明治・大正期までを視野に入れて、日本の芸能がどう変わってきたかというものを研究しています。また日本国内だけでなく、外国との関わりの中で日本の芸能の位置づけを考えてみたいと思っています。

——古井戸さんは、早稲田大学演劇科の助教でいらつしやいます。三年前から、当館所蔵の芝居番付の目録化に御尽力を頂いています。

古井戸 専門は、江戸期の歌舞伎の研究ですので、明治・大正期については、あまり詳しくありません。しかし、江戸の芝居の研究には、番付の調査は避

けて通れませんから、以前から番付の整理を手がけていました。その縁でこちらの番付の目録化を、お引き受けすることになりました。

——番付目録作成の過程で、九代目市川團十郎の来浜について、新事実が確認されました。一行が明治四年の暮れに横浜へ行き、翌五年正月に下田座の松という劇場で「忠臣蔵」の興行をしたという伝えがありました。まさにその時の番付が存在するのです。伝えの正しさが確認されました。團十郎は、「明治五年の岩伊座を初めとして、横浜に四回来た」というのが『横浜市史稿・風俗編』以来の旧説ですが、その岩伊座の番付もあります。ただし、時期は五年ではなく六年七月、しかもそれが岩伊座のこけら落としであることが、『横浜毎日新聞』の記事と照合することによって確認されます。

古井戸 九代目市川團十郎は、河原崎権十郎、権之助、市川團十郎と名前を変えますが、権之助を襲名した直後に横浜に来たようです。なぜかその時の番付は、まだ権十郎のままなのですが、

倉田 江戸から明治の初めは、役者に限らず名前替え、襲名の時期ははっきりしないのが普通です。一人の人物が、権十郎、権之助、団十郎と三つの名前

を同時期に名乗っているようです。

古井戸 権十郎は、後に八代目市川半四郎となる紫若、市川左團次とともに、東京で大当たりした芝居を持って横浜に来ています。この時には、団十郎の鼻筋に鉄道に関係している人がいたため、試運転中の汽車に乗ったそうで、横浜体験にふさわしい感じがしておもしろいですね。

倉田 明治六年七月に「勸進帳」を岩伊座で演じますが、不入りだったそうです。夏の暑い時ということもあつたでしょうが、弁慶を演じるには、若すぎたのではないでしょうか。江戸では坂東彦三郎が立役としてトップの地位にあり、まだ三十代の団十郎はその後塵を拝していました。



市川團十郎出演岩伊座舞台開きの番付の一部 団十郎得意の「勸進帳」の弁慶(中央)

——当館では六〇〇枚弱の番付を所蔵していますが、全体を御覧になつての印象はいかがでしょう。

倉田 横浜の芝居についての見方が変わりました。日本の演劇、芸能がどう進歩してきたかを見るのには東京を見れば良いのですが、全貌をつかむのは容易ではありません。ところが東京の選りすぐられたものが横浜に来ていて、

日本演劇界の縮図が横浜で練り広げられていたのだということを実感しました。

古井戸 明治・大正期の芸能の動向のすべてが出ていますね。団十郎、尾上菊五郎、左團次らの大芝居だけでなく、比較的値段が安くて、だれでも見られる小芝居という劇場で活躍していた人たちも横浜に来ているし、大阪から新しい役者が来て、新しい芸を見せていて、東西の交流も見られます。歌舞伎だけでなく、川上音二郎などの新派、松旭齋天一、天勝という奇術師も来ています。しかも東京で話題になったものすべてが来るのでなく、選りすぐられたものが来ていることに驚きました。

倉田 単に縮図というだけでなく、横浜で行われた芝居には、先見性とも言うべき新しい動きが絶えずありました。横浜には明治三年、居留地に外国人のための劇場ゲーテ座ができ、オペラを中心とした外国劇が上演されています。また、川上音二郎が新演劇を携えて関東各地を巡演しますが、その皮切りは明治二十三年の横浜でした。さながら芸能の配給元という感じさえ抱きます。

——横浜の先見性というのは、どのあたりが原因があるのでしょうか。

古井戸 芸能興行には、江戸時代からいろいろな規制があり、大芝居を上演するにはそれぞれの地域で鑑札が必要でした。しかもその鑑札の所有者は、代々受け継がれることになっていたのですが、横浜は新しい町なので、古い

因習にとらわれず新しいものが受け入れられたでしょう。

**倉田** 全くその通りですね。今回明治

七年に港座で上演された「近世開港魁」(きんせいみなとのさきがけ)の番付が出陳されますが、この芝居は典型的な例です。ペリーが来航し、幕府が崩壊するという時代背景を踏まえた作品で、仮名ながら西郷隆盛、桂小五郎、徳川慶喜などが出てきます。これまでの芝居は、実名を出さずに時代も置き換えて演じていましたが、明治五年に「演劇は庶民が歴史を知る場であり、仮名を用いることは許されない」という教部省が打ち出した方針に従い、それと分かる名前にしたのですね。そうすると、まだまだ幕臣がたくさんいた時代ですから、東京を中心として徳川家は悪者か、慶喜は朝敵ではない、などおおいに議論が巻き起こりました。そのために港座は大入りになり、熱い視線が集まりました。

——明治五年の鉄道の開通は、芸能の世界にも影響を与えたと思いますがいかがでしょうか。

**倉田** 鉄道が開通されて、横浜の事情はすっかり変わりました。一時間ほどで、東京から横浜に来られるようになったのですが、これは、東京の人にとって、新しい文化に手軽に接することができるといって、たいへん魅力的だったと思います。

**古井戸** 新しい試みと言えば、芝居の照明にガス灯を採り入れたのは、明治十一年に新富座が新築開場したときに

パツついたというのが古い定説でしたが、横浜が先ではないかとの議論が最近出ています。

——港座でガス灯が使われている情景が、フランス人ギメの日本見聞記の挿絵に描かれています。しかし異論もあり、定説とはなっていないんですが、ゲート座の研究者升本匠彦氏によると、それよりも早く、明治五、六年頃にはすでにゲート座で用いられていたようです。

**倉田** ととろで、「漂浪奇譚西洋劇」(ひょうりゅうきだんせいようかぶき)の錦絵が展示されるそうですが、これは大好きな芝居の一つです。従来の歌舞伎と異なり、素材に外国が入ってきて、外国人の役者も出演するものです。あら筋は静岡県の漁師二人が漁に出て、嵐に遭いアメリカの船に助けられ、サンフランシスコに行く。若い方の漁師、これは団十郎が演ずるのですが、外国生活に慣れ、ニューヨークからロンドン、さらにパリへ渡り、日本に帰ってくるというのですが、パリの場で、オペラの一節が演じられるのです。



倉田喜弘氏

——上演されたのは、東京の新富座でしたね。入りはどうだったのでしょうか。

か。

**倉田** 残念ながら評判は、良くなかったようです。日本人が、まだオペラというものを良く知らない時代ですし、原語で歌われたのではちんぷんかんぷんでしょう。しかし、こういったものをやろうとした時代の力を評価したいですね。

**古井戸** オペラは、ゲート座に来ていた外国人俳優が出演したのでしたね。

**倉田** 外国人俳優を呼ぶとき、新富座の座主守田勘弥は、団十郎、菊五郎と振り付けの花柳寿輔、狂言作者の河竹黙阿弥を連れてゲート座に実見に来ています。勘弥は、もともと新富座に外国人を呼びたいと思っていて、肝腎の役者たちに見せようとしたのでしょう。歌舞伎の世界でもこの時代には旧習を打破して、新しい演劇を作ろうという芽生えが感じられます。

——団十郎が横浜に来た頃は、まだ一流になっていない時ですが、横浜で吸収したものが彼の後の芸風につながったとは言えませんか。

**古井戸** 竹柴其水という作家が、「団十郎が活劇とか改良とかいろいろやっただが、そのきつかけになったのは横浜ではないか。鉄道に乗ってきた時に味わったことが彼の中で新しい風を吹かせたのではないか」というようなことを言っています。団十郎本人の言ではないので、当たっているかどうか分かりませんがね。

——居留地の外国人のためのゲート座に菊五郎が洋装して見に行っと言わ

れています。

**倉田** ゲート座には、菊五郎、団十郎だけでなく、大勢が見に行っと思えます。明治のごく初期は、居留地にたいして日本政府は種物にさわるように接していましたが、明治十年代になると、逆にどんどん見に行けといった雰囲気になってきます。

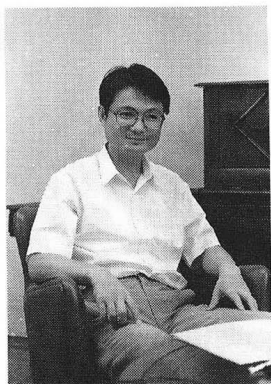
**古井戸** 明治十年代というと条約改正などからむ、欧化政策の現れでしょうか。

**倉田** しかし言葉が理解できなかった日本人はなかなかついていけなかったのではないですか。

**古井戸** 明治の後半には、山田耕筰、坪内逍遙も見に来ています。ただ、日本の習慣と違って、開演が夜八時ころなので東京に帰るのが遅くなって大変だったようです。

——団、菊、左が主流になると、取り残された保守派の坂東鶴之助らが横浜の賑座を拠点として小芝居を打ち、人気を取り続けます。賑座では同じ役者が時流にお構いなしの歌舞伎を数年間にわたって打っているのですが、常連客がついていて経営的には成り立っています。その常連客には、ハンケチの縫い取り加工を職とする若い女性たちが多かったのです。俗に「ハンケチ芝居」と呼ばれています。横浜では、先端を行く試みが行われているかと思うと、保守派に属するものも庶民階級の人気を集めていて、二面性を持つていた町とも思えます。





古井戸 秀夫氏

を見ざる者は、共に現代を語るべからず」というのが、同年七月、横浜来演時の『横濱貿易新報』のキャッチフレーズでした。横浜は、須磨子に温かい目を注いでいたのだなと思います。

**古井戸** そういえば、高知県から女性だけの一座が横浜に来たときの番付がありました。女の人の肖像がズラッと並んでいました。横浜には女優を受け入れる土壌があったのでしょね。

——山口定雄の娘で、萬座の座主斎藤調三郎の養女として少女時代を横浜で過ごした定子が、十六歳ほどでデビューした時には「ヤンヤの大受け」と書いた新聞記事があります。

**古井戸** 京都には舞妓さんがいますが、東京では小さな少女の芸を見るという習慣がなかったから楽しかったでしょね。変化は女優の出現だけでなく、演技の内容も違ってきています。役割を見ていると、すごい早変わりをやっています。たった二人で若い男と女が恋を語る場面で、男と女が入れ代わるというのです。いったいどうやるのか、客のためならどんなことでもやるという精神なのでしょう。

——小芝居というのは、そんなにおもしろかったのでしょうか。

**倉田** 明治三十七年に上演され、評判となった芝居に横浜座の「島津政女改心録」というのがあります。これは政改心して善人になるという「ざんげ芝居」ですが、この芝居が評判になったというところに当時のエネルギーを感じます。今日と違って、テレビはもちろんなラジオもなく、新聞もあまり読まれていなかった時代ですが、それでいて社会で何が起きているのか知りたいという庶民の欲求に合致したのが評判の原因でしょう。そして、小芝居は知りたいことをどんどん取り上げてくれたのです。

**古井戸** 講談にも取り上げられますね。

**倉田** 明治の初めに照忠の店員殺しという事件がありました。これを講談師松林伯田が講談に仕立てて大当たりし、芝居でも大入りだったそうです。一種の反社会的素材を舞台化すると、客は非常に興味を持ちました。

**古井戸** 江戸時代の終り頃から、事件が起ると落語とか講談にのせ、芝居に脚色するということが行なわれていたようですね。

——横浜の劇場は、関内に政談演説会や伊藤仁太郎（痴遊）などが講演する比較的硬派の港座と、伊勢佐木町周辺の庶民が詰めかける劇場がありました。が、性格の違いというものが番付からもうかがえるのでしょうか。

**倉田** 劇場の格を経営者が重んじる場

合、港座はその典型だと思いますが、ざんげ芝居などは掛けたくないという見識を持つでしょう。客が来て来なくても構わない、日本文化を背負っているのだという意識で、財力が続くかぎり経営するでしょう。それに対して、堅苦しいことは捨てて、客が来るのが大事だと考える経営者もいます。

——当館の番付は、劇場により残り方が違っていき、ほぼ網羅的に集められた劇場と、極め付きを選択して集められた劇場があるようです。下田座さの松、港座などは後者のようで、話題となったものばかり残っています。羽衣座や喜楽座は玉石混濁ですが、たくさん残っています。

**倉田** 羽衣座は上のレベルのようですが、勇座のようにどちらを狙っているのかはつきりしないところもあり、劇場の性格付けは難しいですよ。

——興行形態に顕著な変化が現われるのは、松竹の登場からだと思えます。横浜でいうと横浜座、横浜劇場にその影響が出てきます。横浜座や横浜劇場には新歌舞伎が来演し、松井須磨子も来る。横浜の演劇は、団・菊・左の時代、小芝居全盛の時代、新派の時代、そしてその次の松竹全盛時代の四つくらいに分けることができると思います。

**倉田** それは、横浜だけでなく明治大正の日本演劇界の一般的な傾向ですね。全体を通して感じるのは、今日演劇には「芸術」という先入観が持たれているようですが、今回の番付を

見ているとそんな感じは全くしません。身近な隣にいた人が芝居に出ているという感じがします。当時の芝居の見せ場は何かというと、役者が舞台上に上がり、自分の身の上話に類することを延々と語るのです。たとえば、「新版歌祭文」野崎村の段と表題は歌舞伎のようになっていますが、お光さんが大根を切りながら語りはじめると、客は拍手喝采を送るといったあんばいです。そういう演目をいくつか持っている役者は各地から呼ばれます。興行主は、長い作品の中に「中幕」として入れるのです。

**古井戸** それで「中幕」には「唄（こも）山姥」が多いのですね。あれは主人公が一人で勝手なおしやりをする場面があるから。それに類するのに江戸時代の旅役者は、持っている衣装の数が評価の分かれ目になっていて、どんな芝居であっても持っている衣装すべてを着て舞台に出ていって見せるということがあります。

**倉田** 新聞には「くだらないことを延々としゃべらず、早く本筋をやれ。演劇の向上には何の役にも立たない」という評も載っています。

——新聞の評は、ハンケチ芝居を悪く言っていますが客は大入りで、新聞の評とは全く関係ないのもおもしろいですね。本日は長時間、大変興味深いお話をありがとうございました。

(九月二十一日横浜開港資料館にて。聞き手は館員の斎藤多喜夫、吉良芳恵があたりました。)

資料よもやまばなし

# 伊勢佐木町通りの劇場街

いわゆる伊勢佐木町通りは、明治三二年八月一二日の大火によって様変わりするが、大火前の通りの様子を伝える画像資料は意外と少ない(彩色アルバム「明治の日本」二〇・二二頁参照)。

図①は、明治三七年投函された絵葉書で、「Theater Yokohama」としか記されていないが、看板の演題から図②の芝居番付が対応し、明治二九年当時の髙座であることが判明する。吉田橋際伊勢佐木町入口、吉田町二丁目に所在し、明治二〇年二月三〇日新築開場しているが、三二年の大火で焼失した。大火後、伊勢佐木町通り周辺の焼失街区は横浜市によって市区改正がなされ——この経緯は「横浜市会史第一巻」六三三〜六四一頁が詳しい。

伊勢佐木町通りは幅員六間から八間に拡張され、歩道も設けられた。市区改正の実効は、明治三九年測図の陸地測量部作成二万分之一地図によって確認することができる(図③)。また、大火後の復興劇場については、明治四一年刊行の中谷多一郎編「和英横浜案内」に、羽衣座(明治三六年焼後再築のもの)、

賑座(図④)、喜楽座(図⑤)、横浜座の四座の外観写真を見いだすことができる。

以下、当館所蔵ペドラー・コレクション中の絵葉書によって伊勢佐木町通りの劇場街をみとめる。図⑥は、吉田橋際より松ヶ枝町・賑町方面をみたもので、右手に横浜館がみえる。大火後の髙座跡に建った勸工場であるが、明治四四年七月一日活動写真館になった。向いの塔付三層楼は勸工場帝國商品館で、大正三年二月一五日焼失、跡地には平沼銀行本店が進出している。

図⑦は、松ヶ枝町(現伊勢佐木町二丁目)から吉田橋方面をみている。右手の三層楼が横浜電気館。元は勸工場東洋館で、明治四二年一月一日活動写真館として改装開場している。向いには左右田銀行松ヶ枝町支店があった。

図⑧は、賑町(現伊勢佐木町三丁目)喜楽座前から吉田橋方面をみたもので、中央の大建物が又楽館、その左隣がオデラン座である。後者は明治四四年二月二五日、前者は明治四五年七月一二日の新築開場で、ともにドイツ帰りのハマツ子建築家矢部又吉の設計になる。

図⑨は、オデラン座前より逆方向を写したもので、右手の劇場が大正四年四月二八日改築開場成った喜楽座である。改築の内容は、「中央に礼売場

、



図 1

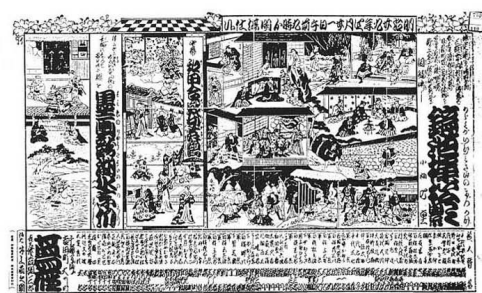


図 2

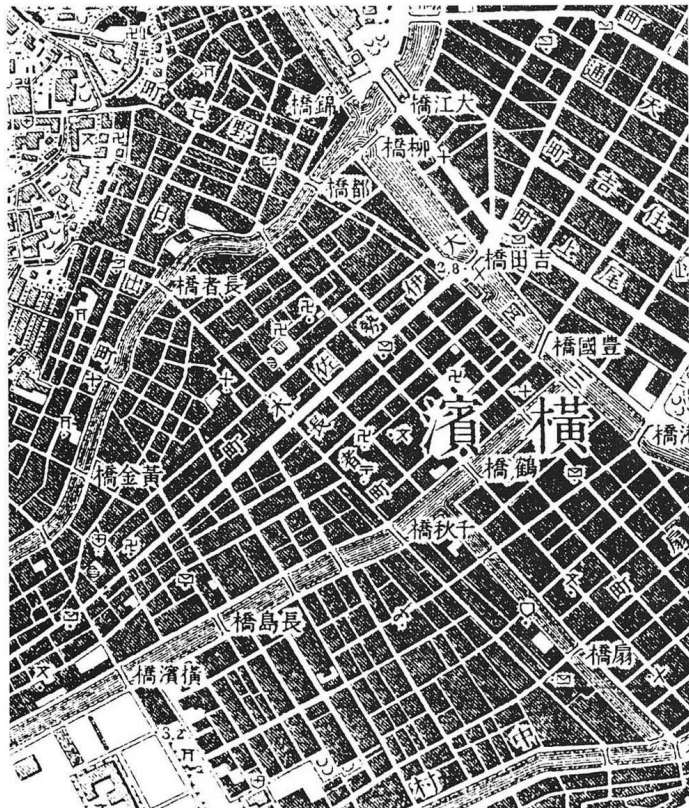


図 3

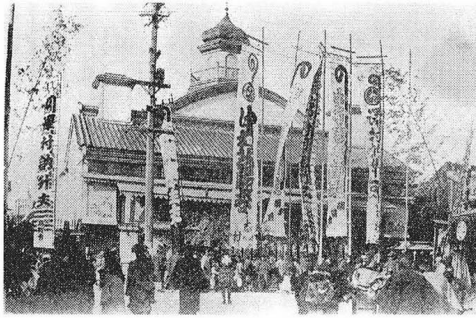


図 5

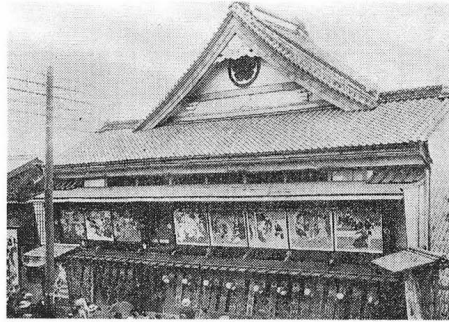


図 4

左右に入口、場内は従来の東ウツラ前高を小児席、西は花道と柵全部を追込みの立見場とし、土間は勾配付けて連席椅子を三側に列べて三等席とす、二階東西棧敷は二等、正面棧敷は一等、前中、後の三船は悉く二等の座席に充

てたり、此外之までの幕見場は前を二等座席、後を一等席、其前を特等席としたり、舞台アーチは其まゝなるも舞台は新に張替へ裝飾には和洋楽器の漆喰工を施せり、改築は総て活動常設式なるも芝居興行の際には花道を取附け、

大道具大仕掛に早替の趣向なり」(「横浜貿易新報」大正四年四月二十九日)と伝えられるように、改築といつても、全面的なものでなく前面と内部の改装であつたことがわかる。  
図⑩は、賑町から吉田橋方面をみ、

右に改装後の朝日座(元賑座、大正四年七月一五日改名)を写す。大正一〇年頃の光景か。図⑪は、賑町二丁目の敷島館(須賀健吉編「横浜案内」大正八年刊より)である。  
(堀 勇良)

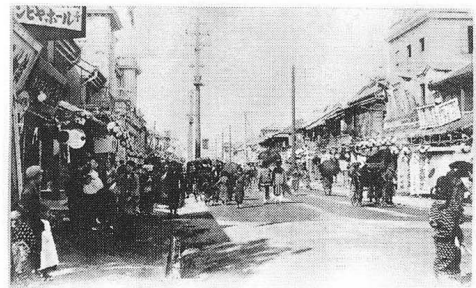


図 7



図 6



図 9



図 8



図 11

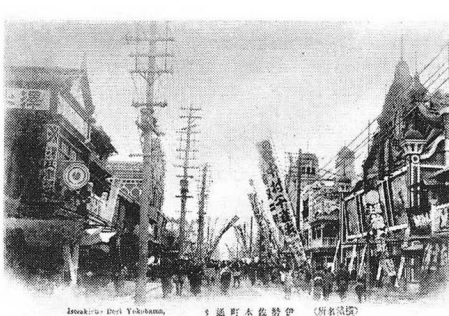


図 10

横浜新風土記稿

12

横浜市域の製糸工場〔続〕

3 繭の調達と仙田製糸

本論にはいる前に一つ報告しておきたい。前々号で不完全な製糸工場

所在地図を掲げたが、その後、上川井小学校長・有馬純規氏から、泉・戸塚・瀬谷区内にあつた製糸工場に関する現地調査の結果を提供していただいた。

この調査は、工場経営者の氏名、地番にまで及ぶ正確な工場の所在地などを、工場経営者の子孫に一々あたって現地で確認されたもので、とても手間のかかる貴重なお仕事である。お蔭で前回の展示「商標に見る生糸の歴史」には、この地域の正確・詳細な製糸工場所在地図を展示することができた(この地図はとりあえず、当館の展示の記録である「情報ファイル」で閲覧可能になるはずである。紙面をかりて、改めてお礼申しあげる。

さて、以下、問題にしたいのは、有馬氏の調査で完全なものとなつた製糸工場の所在地についてである。つまり、なぜ横浜市域の工場は、二俣川・中和田・瀬谷・中川村といった地域に集中したのだろうか、という点である。

製糸工場は、境川・大門川・相沢川・

阿久和川という横浜市の最西部をほぼ北から南に流れる川に沿って存在したことが、有馬氏の調査にもとづく所在地図によって明確になった。

器械製糸業には、良い水がたくさん必要とされた。長野県諏訪地方の器械製糸業の大発展の一因も、諏訪湖を中心とする水の便にあつたと言われる。

しかも、諏訪の製糸工場は、最初その動力を水車にもとめるものが多かったから、水車を回すに足る水量の確保が製糸家にとって重要な課題であつた。

そのため、諏訪の製糸家は、地元農民の灌漑用水を圧迫しながら、製糸用の水車を回したのであつた(高村直助「明治後期諏訪製糸業における水車動力」『国立歴史民俗博物館研究報告』第一五巻参照)。

もつとも横浜市域の製糸工場の場合、動力は蒸気によるものが多かった(『全国製糸工場調査表』参照。前号の「横浜新風土記稿 横浜の養蚕製糸業(斎藤多喜天稿)」で紹介された持田製糸の場合、農民の苦情のため水車をあきらめ人力によって工場を始めたという。水利は、器械製糸工場の立地条件の

第3表 橘樹・都筑・鎌倉・高座郡各町村の桑畑面積の畑面積に対する割合

割合%	町 村 名			
	橘樹郡	都筑郡	鎌倉郡	高座郡
30~		柿生・岡上	瀬谷	有馬
20~29	中原・稲田	中里・二俣川		寒川・田名・大沢・相原・大野・渋谷
10~19	住吉・橘・向丘	都田・新田・中川	豊田・中川・中和田・富士見・長尾・俣野	茅ヶ崎町・小出・御所見・海老名・座間・麻溝・溝・大和・綾瀬・六会
【10%未満の町村】〔橘樹郡〕保土ヶ谷町・城郷・大綱・旭・子安・生見尾・町田・田島・大師河原・川崎町・御幸・日吉・高津・宮前・生田〔都筑郡〕山内・田奈・新治・都岡・西谷〔鎌倉郡〕村岡・深沢・川口・腰越津・鎌倉町・小坂・玉縄・本郷・永野・川上・戸塚町〔高座郡〕藤沢町・新磯				

資料)『神奈川県農会報』 第47号・第59号の各市町村の「畑反別」「桑樹反別」より算出。



仙田家の全景。ただし製糸工場はまだ見えない。(仙田允治氏蔵)

一つではあったが、動力以外の製糸用水を供給しうる川は地域の他の地域にも多い。工場の集中をより強く規定したのは、その地域の養蚕の発展度であったように思われる。

第3表は、一九〇九年の橘樹・都筑・鎌倉・高座郡の格町村の養蚕の発展の程度をみようとしたものである。瀬谷・二保川・中和田・中川(鎌倉郡)村は、境川の川向こうの大和(現・大和市)・渋谷(同)・綾瀬(現・綾瀬市)などの高座郡の村とともに、桑畑面積の畑面積に対する割合が高いグループに属することがわかる。

例外、すなわち製糸工場の所在した町村(前々号に掲げた製糸工場の一覽表参照)で第3表の割合が一〇%未満のものは少ない。もつと早い時期のデータが欲しいところだが、養蚕の発展度の高さと製糸工場の設立とは、密接な相関関係があると思われる。

この点を製糸工場の方から確かめてみよう。現在、横浜地域の製糸工場に関する資料で利用可能な数少ない資料として仙田製糸(瀬谷村瀬谷)に関する仙田允治家文書がある(なお同家文書は同家の御好意により、複製本の形で当館での閲覧が可能である)。その中の、一九〇五(明治三八)年の「新繭買入帳」を整理したのが、第4表である。

この帳簿には、製糸のための原料繭の購入について、いつ、どのムラの誰から、どのくらいの量を、いくらで買ったか、が購入のたびに記されている。

繭の購入は、六月二日〜七月七日頃の春繭(春の養蚕でできた繭)の購入と、八月二〇日〜九月二九日頃の秋繭(秋の養蚕でできた繭)の購入に分かれているので、春秋に分け、ムラ(大字)ごとに、繭販売者の数、仙田製糸に売られた繭の量、その代金をまとめた。

春秋合計の繭の購入量は、約二五〇〇貫であった。なお、仙田製糸の一九〇五年度(当年六月三〇日〜翌年五月一日頃)の生糸出荷は、一回に九貫前後(すなわち和俵一俵 ずつ三六回、合計三二二貫であった(「製糸出荷帳」による))。

春繭の購入の場合、繭の販売者は、瀬谷をはじめ宮沢・和泉・飯田の人が多い。繭の購入範囲は、合併村単位でいうと瀬谷村とこれを囲む都岡(現・旭区)・中川村(現・瀬谷・戸塚区)・中和田村(現・泉区)、および境川を越えた渋谷・綾瀬・大和村にほぼ限定され、下瀬谷からほぼ半径約六キロメートルの円内に入る。例外は保土ヶ谷町・妻田村(現・厚木市)であるが、比重は小さい。また、秋繭も同様である(和泉が見当たらないのは、破損箇所のためかも知れない)。

表中ムラ名が不明とあるのは、この帳簿の中に、ムラ名が付されていない販売者が春に二九名、秋に四一名あるためであるが、そのうち三名(春一名、秋二名で一人は同一人物)は仙田家の小作人である(後述)。この種の帳簿では、よく知らない他のムラの人間につ

第4表 仙田製糸の繭仕入状況(1905年度春秋繭)

ムラ名(合併村名)	春 繭				秋 繭			
	購入人数(A)	繭購入量(B)	代金(C)	C/B B/A	購入人数(A)	繭購入量(B)	代金(C)	C/B B/A
瀬谷(瀬谷村)*1	20	299	1235	4.1 15.0	6	25	109	4.4 4.1
宮沢(瀬谷村)	13	152	609	4.0 11.7	7	20	89	4.4 2.9
和泉(中和田村)	9	149	594	4.0 16.5	0	0	0	— —
飯田(中和田村)	6	69	290	4.2 11.5	5	16	68	4.2 3.2
中田(中和田村)	3	66	281	4.3 22.0	3	35	162	4.7 11.6
深谷(富士見村)	2	45	183	4.1 22.3	0	0	0	— —
福田(渋谷村)*6	6	86	360	4.2 14.3	4	18	77	4.3 4.5
二ツ橋(瀬谷村)	3	40	169	4.2 13.3	3	8	36	4.4 2.8
保土ヶ谷(保土ヶ谷町)	*2 2	37	156	4.3 18.3	*3 2	54	247	4.6 26.9
上和田(渋谷村)*7	3	27	106	3.9 9.0	3	10	40	4.0 3.3
妻田(妻田村)	1	22	98	4.4 22.0	1	17	76	4.6 16.5
寺尾(綾瀬村)	1	20	85	4.3 20.0	0	0	0	— —
名瀬(中川村)	1	12	49	4.2 11.7	0	0	0	— —
[上]川井(都岡村)	1	11	43	3.7 11.4	1	1	5	4.2 1.1
蓼川(綾瀬村)	2	18	63	3.5 9.0	0	0	0	— —
草柳(大和村)	2	9	36	4.0 4.5	1	5	23	4.4 5.3
下川井(都岡村)	1	5	18	3.7 4.9	0	0	0	— —
阿久和(中川村)*4	0	0	0	— —	2	12	55	4.4 6.2
破損など	0	0	0	— —	*5 7	55	251	4.5 7.9
小計	76	1066	4375	4.1 14.0	45	276	1237	4.5 6.1
不明	29	649	2795	4.3 23.9	40	502	2393	4.8 12.3
合計	102	1715	7170	4.2 15.7	85	778	3630	4.7 9.2

資料) 仙田允治家文書「新繭買入帳」(1905年)

- 注) (\*1)橋戸、原を含む。(\*2)他に「保土ヶ谷仕入」125円(購入量不明)がある。
- (\*3)うち1名は名前の箇所読解困難につき1名の可能性あり。
- (\*4)三ツ境1名を含む。(\*5)破損によりムラ名読解困難のもの4名。
- (\*6)山下を含む。(\*7)資料上では宮久保・久田。

いては、その名前にムラ名を記すのが通例であり、このムラ名「不明」者は、そのほとんどが仙田製糸のあるムラである瀬谷の人々であろう。

次に、各販売者からどれくらい規模の繭を購入したかをみよう。平均の数字は表出したとおりだが、春繭の場合、最大量の販売者は八〇貫で、これに次ぎ五〇貫台二人、四〇貫台一人で、最小量の販売者は九五〇匁(〇・九五貫)であった。残りのほとんどは五〇三〇貫の販売である。秋繭はさらに繭の購入規模が小さい。繭の購入は、大勢から少しずつ買っていると言える。つまり、仙田製糸の原料繭は、ほぼ瀬谷およびその近隣の養蚕農家から調達されたと思われる、仲買の繭商人からまとめて買うことはほとんどなかったと思われる。当時は、まだ秋蚕が普及しつつある時で、各農家の秋蚕の取繭量が春蚕より小さかったため、秋繭の各販売量が春繭より小さくなったのである。

繭の販売者の個々を知る資料はほとんどないが、その一部は、仙田家の小作人(仙田家の土地を借りて耕作する農民)であった。年次が一〇年前だが、一八九五年の同家の「小作年貢領収帳」と照合すると、仙田家から耕地を借りていた小作人六一名のうち、二三名が第3表の繭の販売者にもなっていた。

このような仙田製糸のような事例は、横浜地域や高座郡の製糸工場に限らず、明治前・中期に東日本の養蚕がさかんであった農村では、よく見られたこと

であろう。地元での養蚕から生産される繭を原料に、手挽き・座繰の製糸がおこなわれ、やがてその中からみずから器械を備えて製糸工場を経営するものがあらわれた。しかし、その前途は概して多難であった。仙田製糸は一八九八年に開業し、明治末に閉業したようだ。

他地方に先駆けて明治前期に多数の小製糸工場を生み出した長野県、とくに諏訪地方では、一八八〇年代に急増するアメリカの需要に急速に対応しながら、製糸工場が急成長していった。諏訪の製糸家たちは、やがて地元の繭の不足に直面し、埼玉を手始めに、全国各地の養蚕地方に繭購入に出かけるようになり、明治中期以降、繭購入をめぐって地元製糸家と諏訪製糸家の対立が激しく展開された。地元の製糸家は概してその敗者であり、いつぼう、諏訪製糸家たちは、明治後期以降、各地の製糸場を買収・新設して、「県外進出」をしていったのであった。

地元製糸家の敗北した地域の養蚕業は、その後も拡大するが、その増大する繭の多くは、諏訪へ送られたり、諏訪製糸家の県外工場で消費されるようになっていく。生糸貿易の玄関である横浜からそう遠くない横浜地域の製糸工場の歴史も、そのようなイメージで捉えてはば大過なさそうである。

(井川克彦)

横浜人物小誌

横浜生まれの革命家

26

馮自由

かつて孫文は「華僑は革命の母である」と言った。清朝を倒して辛亥革命を成功させるため、各地の華僑が寄せた精神面・資金面での支持を称えた言葉である。一九一〇年代、横浜の華僑社会は人口六千あまりを数えるまでに成長し、その中には孫文と出会い、革命成就のために世界を駆け巡った人物がいた。居留地時代の横浜華僑社会の有様は、資料的制約から判らないことがほとんどであり、ましてや個人の具体的な記録となると一層難しい。そんな状態ではあるが、今回はある程度事蹟をたどることが可能な馮自由という人物を取上げて紹介したい。

父馮鏡如のこと

馮自由は一八八三年横浜華僑馮鏡如の子として生まれた。鏡如は原籍が広東省南海県であるが、香港で生まれ育ち、一八六九年に長崎に渡り大浦八番に文具を商う店を開いた。その後まもなくして横浜に移り商売を始めた。一八七四年の「The China Directory」の横浜の項には、「居留地七八番に Noronha & Co. Agents for Manila Lottery, Noronha, D.I. Kingsell」という記載が見える。香港での生活経験のある中国人の多くは中国語と英語

の二つの名前を持っているが、Kingsell とは馮鏡如の英語名である。その後一八七八年には居留地五三番に文経文具店という店を開く（現在の警友病院のあたり）。この店は文具販売だけでなく、印刷・製本も引受け、また茶や生糸の梱包袋などの販売代理店も兼ねていた。当時、居留地内にはこのような中国人経営の印刷屋が数軒あり、中には従業員を二十人近く抱える店もあった。



1881年版の「The Japan Directory」に掲載された文経文具店の広告。

革命との出会い

馮自由は横浜居留地で生を受けたが、幼年期は広東に帰って教育を受け、一八九五年の夏、再び横浜の土を踏む。一方、この年の十一月に孫文が横浜に亡命する。孫文は一年ほど前に初めて横浜を訪れ（但しこの時は上陸はしてない）、父馮鏡如と会見し、横浜での革命組織興中会会の設立を依頼している。孫文が再び横浜を訪れたのは、広州起義に失敗したため、先年鏡如に託した

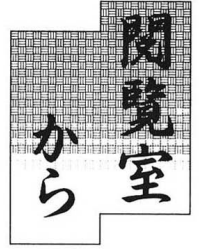
興中会支部を基盤に革命勢力の立て直しを図るためであった。馮鏡如とその弟馮紫珊は孫文を迎え入れ、文経文具店で正式に興中会を設立した。少年馮自由はここで初めて孫文と出会い、革命に目覚める。十四歳のことである。横浜・東京での革命運動

一八九七年馮自由は横浜大同学校に入学する。この学校は初め孫文ら革命派が中西学校として居留地一四〇番に設立したが（現在の横浜中華学院・関帝廟所在地）、まもなく来浜した康有為ら保皇派が経営実権を奪い、大同学校と改名したものである。戊戌政変で日本に亡命した保皇派は横浜華僑社会での支持基盤を広げ、革命派は窮地に追い込まれた。馮鏡如も保皇派に傾斜し、その宣伝機関紙「清議報」を文経文具店から発行している。自由も当初は「清議報」の編集に携わっていたが、保皇派の思想的締めつけに憤慨し、名を自由と改め（馮自由の原名は燃龍）、革命派の雑誌「横浜開港報」を発行した。この頃から、革命思想の普及を使命としてペンを執る革命著述家としての性格が現われる。一九〇一年、早稲田大学の前進東京専門英学政治科に入学。翌年には退学するが、この間東京の留学生と広東独立協会を設立し、また章炳麟が提唱した支那亡国二百四十年記念会を開催するなど、横浜・東京での革命派の活動に直接関与した。香港・シンガポール・北アメリカ一九〇二年、馮自由は香港の大商人の娘李自平と結婚。翌年には香港の「中

国日報」の日本駐在記者となる。その後中国革命同盟会の分会を香港で組織し、一九〇六年には「中国日報」の社長兼編集者となり、以後同紙は革命党の宣伝機関紙となる。さらにシンガポールへ赴き、革命党紙「中興日報」の発刊に尽力する。こうして、馮自由の活動の舞台が横浜から香港・シンガポールへと広がっていった。しかし、一九一〇年の広州新軍之役が失敗に終わると、これまで革命運動を支えてきた東南アジア地域の華僑の間で革命への失望が広がった。そこで、革命派は北米に新たな活動拠点を求める。馮自由はまずカナダのバンクーバーに到り「大漢日報」の主筆となる。次にサンフランシスコの「大同日報」の記者を兼務し、革命勢力の拡大・資金の調達に奔走西走する。

辛亥革命以後  
一九一一年十一月、辛亥革命が勃発すると、馮自由は直ちに北米華僑革命党総代表として帰国し、臨時政府の要職に就く。しかし第二次革命、国民党改組等の荒波にもまれ、政治の表舞台からは身を引き、『中華民国開国前革命史』・『革命逸史』等の著作に心血を注ぐ。一九五一年台湾に渡り總統府国策顧問に就任し、以後革命史蹟の継承に余生を捧げた。一九五八年四月六日、台北で病没。馮自由は横浜を起点とし、世界をまたにかけた華僑革命家であった。そして、馮自由を生んだ頃の横浜は、中国革命の一つの基地でもあった。

(伊藤泉美)



今回は、整理中の雑誌の中から、ご寄贈いただいた横浜の郷土史研究団体の会報、会誌をとりあげてみたいと思います。(誌名の五十音順に配列)

○季刊「横浜学」

(「横浜学を考える会」 A5判)

昭和六三年六月三〇日創刊、二号まで発行されている。同会の開催した講演の模様や、会員の随筆等で構成されている。

○郷土つるみ

(鶴見歴史の会 B5判)

昭和五六年六月二五日創刊、二四号まで発行されている。史跡見学報告、資料紹介のほか、郷土の方言や年中行事についてもとりあげている。

○都筑雑記

(「都筑雑記」刊行委員会 B5判)

当館では、三号(一九八三年八月一日)日、五号(一九八三年八月二日)のみ所蔵。調査報告や研究報告で構成されている。

○都筑文化

(緑区郷土史研究会 年刊 B5判)

当館では、二号(一九八二年二月)より五号(一九五八年一月)までを所蔵。会員の研究報告を主としている。五号には、「緑区郷土資料目録」(上)がある。

○とみづか

が演技を競った。その模様を今に伝える「芝居番付」をとおして、横浜の庶民文化や世相の移り変わりを紹介する。  
(2)『横浜の新聞と雑誌』(仮題) 2/6~4月下旬

横浜は、近代日本の情報基地であり、ジャーナリズムのメッカであった。その具体的な姿を、当館所蔵の資料で紹介する。

▼講座

- (1)歴史講座『横浜の芝居―明治・大正期の庶民文化』 11/1~2/3  
幕末開港以来、庶民にとって娯楽の中心となったのは芝居であった。明治時代になると、繁華街として発展した伊勢佐木町界隈に劇場が集中し、一流の歌舞伎役者や新進気鋭の新派の俳優

(郷土戸塚区歴史の会)一、二号より戸塚歴史の会 A5判 年刊  
昭和五一年五月二三日創刊、一五号まで発行されている。戸塚とその周辺地域の歴史を対象とし、毎号資料紹介をのせるとともに、会員の研究発表の場となっている。

○西区郷土史研究会々報

(西区郷土史研究会 B5判)

平成元年一月一日創刊、三号まで発行されている。会員の研究報告のほか地域の人の聞き書きをのせる。

○HOTがやがや

(保土ヶ谷宿4〇〇倶楽部 B5判)

当館では三六号より所蔵。資料紹介等をのせる。

○本郷郷土史研究会会報

(本郷郷土史研究会 A5判)

笠原幹夫 12/8「明治の翻案劇について」松本伸子

(2)英文資料講読会 ブルーム著「一八七二年の横浜」を読む 講師徳岡孝夫 1/12、19、26、2/2、9

(3)『横浜の新聞と雑誌』 展開講演会 講師等詳細未定 3/2から3/30の毎週土曜 全五回

(1)『横浜開港と大岡川の周辺』 11/24(土)午後一時 南地区センター 講師 内田四方蔵 当日会場にて受付 受講料無料

▼歴史講演会

▼寄贈資料

昭和六三年七月三日創刊、当館では二号まで所蔵している。会員の研究報告からなる。

○横浜プロテスタント史研究会報

(横浜プロテスタント史研究会 B5判)

一九八八年九月一日創刊、五号まで発行されている。会員による研究報告を主としている。

○歴研よこはま

(歴史研究会横浜支部 B5判)

昭和五九年二月一九日創刊、当館では二四号まで所蔵(一九九号は欠号)。史跡めぐり等の会の活動報告や会員の研究報告をのせる。

以上は平成三年二月より公開予定です。(上田由美)

(1)鉄道創業時双頭レール(世田谷区祖師谷 平原直氏)

(2)大塚十一文庫 六二七件八七四六六(南区大岡 大塚十三氏)

(3)錦絵「北亞墨利加人アハタムス像」(柏崎市 吉田直太氏)

(4)生糸関係資料 三二点(戸塚区平戸 加藤一男氏)

▼閲覧室の休室

資料整理のため、次により閲覧室を休みます。(展示室は開いています)

○11/30、1/29~2/1、2/28

▼年末・年始等の休館  
○11/12は即位の礼に伴う休日のため開館し、翌13日は休館となります。

○12/28~1/4 年末・年始休館



行事開催予定(平成二年度)

▼展示

(1)『横浜の芝居―明治・大正期の庶民文化』 11/1~2/3

幕末開港以来、庶民にとって娯楽の中心となったのは芝居であった。明治時代になると、繁華街として発展した伊勢佐木町界隈に劇場が集中し、一流の歌舞伎役者や新進気鋭の新派の俳優

二 情 報